

## 9 月月例集会 校長講話要旨

皆さん、おはようございます。本日は土曜日であり、授業時間を確保する必要から放送による月例集会になりました。部活動等の表彰等については、創造祭の閉祭式を利用しようと考えています。

### ○9月1日は防災の日

昨日9月1日は防災の日でした。この日に起こった関東大震災の記憶を忘れないために9月1日が防災の日になりました。そして今年が関東大震災百年目ということで様々な報道等がありました。今日は私も関東大震災を中心にお話しします。

改めて、今からちょうど100年前の大正12(1923)年9月1日(土)午前11時58分に、東京付近で大きな地震がありました。夏休み明けの始業式の後、子供たちは学校から帰宅してお昼ご飯を食べる頃でした。最近の研究では本震と引き続き発生した2つの余震が組み合わさったものだそうです。

本震の震央は、神奈川県西部でマグニチュード7.9、その3分後に東京湾北部を震源とするマグニチュード7.2の余震、さらにその2分後に山梨県西部を震源とするマグニチュード7.3の余震と続きました。最初の本震が激しい揺れが40秒ほどで収まったかなというところで、さらに余震が続いて、5~6分のうちに大きな地震が立て続けに起こったということになります。その後もマグニチュード7以上の余震が何回も続いたそうです。

12年前の東日本大震災でも同様のことがありました。記憶の新しいところでは、7年前の2016年4月14日の夜午後9時26分、熊本県熊本地方においてマグニチュード6.5の地震が発生し、熊本県益城(ましき)町で震度7を観測しました。また、翌日の深夜、16日午前1時25分にはマグニチュード7.3の地震が発生し、益城町及び西原村で震度7を、熊本県を中心に其他九州地方の各県でも強い揺れを観測しました。震度7の地震が同一地域で連続して発生するのは震度7が設定された1949年以降初めてのことだそうです。これらの地震だけでなく、その後も熊本県から大分県にかけて地震活動が活発な状態となり、3か月後の7月14日までに、合わせて震度7を2回、震度6強を2回、震度6弱を3回、震度5強を4回、震度5弱を8回観測するなど、震度1以上を観測した地震は合計1888回発生しました。地震発生から2ヶ月程度経過した6月中旬にも、震度5弱の地震が発生(6月12日)するなど地震活動は継続しました。

100年前の東京直下の地震に話を戻します。これらの地震によってもたらされた災害が、関東大震災ということになります。地震があったのが昼時で、多くの家庭で昼食の準備で火を起こしていました。大正12年の段階では、まだ電気やガス施設は充分には整備されていませんから、さらに当時は燃えやすい木造の住宅ばかりだったので、多くの場所で火事が起こり、2日間火事が続きました。東京の中心部では34平方キロメートルを焼きました。これは当時の東京市内の43%分を焼いたことになります。昭和20年3月10日の米軍による東京大空襲でも、その1/3の13平方キロメートルの焼失ですから、この時の火災の規模が大きかったことがわかります。

この震災で行方不明者も含んで亡くなった人は、約10万5千人。東京市(約6万9千人)、横浜市(約2万7千人)で合わせて9万6千人で、死者の約9割を占めました。死因は焼死(焼け死んだ人)が約9万2千人で全体の9割近くを占めています。地震そのものの被害というより、その後に起こった火災での死者が殆どだったということになります。

今から約25年前に、東京都がマグニチュード7.2の東京直下型地震の被害予想を行いました。想定では、一番火を使う、冬の平日午後6時に、関東大震災時より弱い風速6mのシミュレーションで、東京都23区内で約75平方キロメートル、多摩地域で約20平方キロメートル、併せて約95平方キロメートルの火災があると予想しています。これは関東大震災の約2.6倍の焼野原ができてしまうこととなります。住宅の密集している大都会近郊に住む私たちは、東日本大震災のような津波の心配よりもまずは火事の心配をしましょう。もちろん、茨城県の太平洋沿岸部は津波などの心配をしなければなりません。住宅が密集する地域では、どこでも火事が起こっていますから消防を待つことができません。まずは初期消火を近所の人たちと助け合って、消火活動というか、火事の広がりを防ぐことをする必要があります。そして、身の危険を感じたら、火のそばから逃げる。学校や公園、河川敷など火の気のない場所や広域避難所に逃げるしかありません。自分の逃げる場所、家族と一緒にいる場所はどこになるかを日ごろから確認しておきましょう。

関東大震災での不運な状況は、当時の加藤友三郎総理大臣が8月24日に急死して、28日には後任の首相は内定しましたが、組閣中で政府の空白期間中に、大地震が起こったということです。内田外務大臣が首相臨時兼任して対応に当たることになり、9月2日の夜に後任の山本権兵衛内閣が成立しました。そのため対応が迅速にできていなかったという批判があります。

また、震災当時は、ラジオ放送は始まっていませんでした。ラジオ放送が始まるのは、1年半後の1925年3月からです。100年前、多くの人々がいち早く情報を得る手段としては新聞だけでした。しかし、東京の新聞社が電信、電話等通信機能も含めて壊滅してしまったので、日本国内の一般の多くの人々が東京を中心とした震災の詳しい状況を知ることができたのは、大阪朝日新聞が9月4日午前に号外を出して、その後、各新聞社などが詳しい状況を伝えられるようになったということです。地震発生から数日たってようやく大地震の様子が伝えられたということになります。その間様々なデマが広まりました。あやふやな情報に惑わされることなく冷静な判断、行動が必要ということになります。

この時代のアメリカの新聞記事では、「かかる大災変に処して、東京の秩序整然としていることは実に驚くばかりで、…今回の日本での震災においてはほとんど無警察状態であったにもかかわらず、忌まわしい犯罪もない…」と紹介されました。これは12年前の東日本大震災でもイギリスのBBC放送では、「地球最悪の地震が世界で一番準備され訓練された国を襲った。犠牲は出たが他の国ではこんなに正しい行動はとれないだろう」と報道されています。もちろん関東大震災でも、東日本大震災でも、様々な犯罪行為等も多かったのですが、それ以上に私たちの行動が秩序だって、他者を思いやる振る舞いが多かったということでしょう。

私たちはこれらの震災を教訓に、大地震そのほかの災害にあっても冷静な行動をとれるように心がけておきたいものです。

今日は夏休み明けのお話としてやや長くなりましたが、関東大震災100年ということで、防災についての講話としました。